

在外研究報告

上海滯在顛末記

永井 政之

本来から言えば、在外研究員としての報告はいつの日か研究成果としての学術論文をものにすればそれでよいはずであるが、いかんせん外国での生活は、日本にてあれこれ想像していたのとは随分と予想に反するものであり、そんな細部にわたる点を論文にすべくもないのであるから、ここではその論文になりにくい部分を手前勝手な捉え方と批判されることを承知のうえで、書いておくものとしたい。一つは私自身のメモであり、今一つはあるいは今後中国へでかけることを希望される方への参考に供するためでもある。

ところで私は、この文章を上海社会科学院の招待所三〇一号室の円形のテーブルに向かって書き始めている。時に六月九日夜八時である。ほとんど薄暗い部屋の明りと、室内アンテナのせいでやたらと画面の揺れるテレビが前にある。いつ擱筆するか分からぬが、時間だけはタップリあるから遅くとも帰国前にはと願がつてゐる。これも本来から言えば、帰

国して落ち着いてあれこれ整理し、そのうえで執筆すべきなのであろうが、昨日九日、上海は六月上旬としては三六年ぶりの猛暑にみまわれ三六・二度を記録した。もちろんこれは、唐突に三六度になつたのではなく、四日前程から三〇度を越える日が続き、今日は少し涼しくて三二度という、日本の夏そのものの陽気なのである。昨日私は、その猛暑の中を、觀潮で有名な錢塘江のほとり鹽官にいた。記録破りの暑さになるなどとは夢にも思わず、鹽官齊安のいた安國寺を見るためにでかけたのである。方冊版明藏開版の嘉興の楞嚴寺も見られたし成果はあつたのであるが、帰る途上で、乗つていたワーゲンサンタナがついにオーバーヒートを起こし、クーラーはきかず、吹き込む熱風で頭痛さえ覚えたのである。

さらに招待所の三〇一号室にはクーラーはあるが、これが旧式で音のみ勇ましく、温度が少し下がるととたんにファンのみになると言う代物で、様子を見にきた修理屋が「これは

中国製だから」と言つたのにはいささかまいった。ちなみに会議室においてある大型のクーラーは日本の某社の製品でこれはものすごくよく冷えていた。——天候のことと追記しておくと七月に入ると上海は二〇日までの間に三五度を越える日が一二日、三八度を越える日が七日あり、降雨量も少なく、死者数一〇人が出るという天候異変の夏であつた——。

ともかく考えてみると夏はこれから本番だし、聞くところでは最高気温四〇度はいくらいから、夏休みは必ず群馬の山寺で過ごしてきた筆者がどうなるかなど保証の限りではないし、この小論を掲載すべき仏教学部の論集の締切が来年の今ごろとすると、文章が整理されて要點だけになつたとしても、大体書く意欲が湧くかどうか定かでない。そんなこんな思いをめぐらして筆をとることにしたのである。書きつぎ書きつぎの文章であるから、多分時間の経過は行きつ戻りつということになろうがお許し願いたい。

さて筆者が上海に来る直接のキッカケを作つてくれたのは、上海とは特別に縁の深い内山書店の編集長三浦勝利氏であった。氏とは筆者が『禪学大辞典』編纂所に実務員として勤務していたおりに知り合い、以後いくつかの共通の場を持つたが、中国に観光ではなくて長期滞在をしてみたいと言う漠然とした願望が急に実現したのは、氏が上海をしばしば訪れる中で社会科学院外事処の王徳華氏と折衝してくれたから

である。ともかく四〇を過ぎてからのにわか仕込みの中国語がどこまで通じるのかという不安のみが先に立つたが「月に六〇〇元払えば通訳を付けてくれる」という氏からの情報でようやく決心したのである。もっとも上海に来てみれば社会科学院には日本語がペラペラの若手の研究者が何人かいりし、英語の話せる人はそれ以上と、あえて中国語でやる必要は全くなかった。ただしそれは公的な場での話で、招待所の服務員の人たちとは中国語でなくては絶対にだめであった。しかも北京語でさえ分からぬのに、上海なまりの北京語でまくし立てられると、とたんにお手上げであった。それでも窮すれば通ずで、双方の歩み寄りの結果か、それとも向こうが諦めたのか、日常の生活は何とか大過なく過ぎていった。招待所には一〇人ほどの服務員がいるが誰もが親切で、ここまで何とかやって来れたのは、この人たちのおかげといつて良い。

ところで社会科学院への訪問者は、一年に一〇〇〇人を越すというが、この招待所に長期滞在をする人はほとんどないという。ありていに言って、実はそれだけ外国人向けの食事の味付けがダメなのである。通訳を勤めてくれた陸一心氏——彼は筆者が中国に入国する前日の三月三一日、學術振興会の招きによる日本滞在を終えて帰国した——に言わせても、指導の任に当たつて下さった高振農先生に言わせても、

こここの食堂はまずいと言う。ハツと気が付いたときは既に遅く、バンドの穴が三つほどウエストが締まっていた。一日二五元——これは後に一五元に減額された——の食費で出るのは、朝は粥、昼夜は二菜一湯で食欲がほとんどない。見る見るやせていくのを一番心配してくれたのがこの招待所のおばさんたちであった。出国の前に「食べられなくなったら錦江飯店へ行け」と教えてもらっていたが、わずか一〇分の距離も歩くのが億劫である。確かに錦江飯店には先ず「ジエシカ」なるスーパー・マーケットがあつて、カップヌードルから酒のつまみ、醤油、ビールに梅干と、まあ贅沢を言わなければ日本の味は一通り揃っているし、香港との合弁という「銀座」なる店ではソバ、うどん、カレー、ナッシュ、カツドン、スシと東京のレストラン顔負けである。顔負けなのは品数だけではなく、値段もある。開放政策をとっている中国では、物価の上昇がいつも新聞紙上を賑しており、実情はインフレそのものである。給料面での配慮もあるが、それでも一元約三五円のレートで一ヶ月一〇〇元前後、ボーナス——

日本のように年一回ではなく、それを一二等分して支給のこと——も含めて一〇〇~二〇〇元がおおかたの給料と見て良いらしい。筆者の知りあつたある人は、ボーナス別の給料が八〇数元で、奥さんとの合計は食費でほとんどなくなると云う。ただし彼は別にアルバイトをしていて、それが月に二〇

〇元を越えるのでやつていけると言つていた。給料より多いアルバイトとは一体どういうことなのか理解に苦しむが、ともかく事実らしい。その中国で「銀座」の食事は天ぷらウドン二四元、カレーニ六元など、ともかくすべて日本並みなので滞在した。一日約一〇〇元は外国人の料金としては格安に違いないが、これとても彼等の給料に比較すれば、ほとんど一ヶ月分である。そんな訳で、筆者が「銀座」で食事をしたのは教えるほどしかないが、その度に何となくボラれたという感は否めなかつた。

ともかく社科院の人たちは、誰もが親切で、——もちろん悪口を言われても分かるわけはないのだが——日本人が全くいらない生活も慣れてみれば悪くない思い出だしたのが五月の中旬以後である。結構顔見知りも出来、若い連中と酒を飲みに出て門限を破り、二メートルほどの塙をよじ登つたあげく「外国人では初めてだ」と変な褒め方をされたのも最近のことである。

余談が長くなつた。ここで上海社会科学院について触れておく必要があろう。

ここ上海社会科学院は『世界宗教研究』などの諸雑誌を刊行している北京の中国社会科学院に比べると日本でのなじみ

は、今一つ薄い。ところがそのように考えるのは、どうもわれわれの認識不足で、上海市にとつてはやはり行政のブレーンとしての役割を強く持つ組織であることを認識させられた。早い話、今年一九八八年の全人代の上海代表团では、社会科学院長の張仲礼氏が副團長を努め、その報告会の議長も張氏が努めるといった具合であるし、また招待所の三階の一室には、黄浦地区の再開発のための事務所が常設されていたりするのである。いわゆる日本的な感覚でする学術研究一本やりでないところに、上海だけではない、中国の学問研究の特色があると見てよいであろう。

上海では南京路に次ぐ繁華街、淮海中路に面した社科院に到着した次の日、筆者は高振農氏、陳耀庭氏、業露華氏の三人とお会いし、社科院についての説明やらを受けたが、それらを総合するとおおよそ次ぎのようになる。

一九五八年九月、社科院は華東政法学院、上海財經学院、復旦大学法律系、中国科学院上海経済研究所、上海歴史研究所の合併組織として発足した。文革中は閉鎖のやむなきに至つたが、一九七八年一〇月に再開し、現在は次ぎの研究所があるという。

世界経済研究所	世界経済研究（隔月）
歴史研究所	史林（季刊）
法学研究所	政治与経済（隔月）
文学研究所	文学研究（不定期）
情報研究所	文摘・外国文学報導
蘇聯東欧研究所	今日蘇聯与東欧
新聞研究所	
社会科学研究所	
人口学研究所	
宗教研究所	
青少年研究所	
経済・法律・社会諮詢中心	
社会科学人才培訓中心	
図書資料情報中心	
社会科学院	全部で一四の研究所と三つのセンター、研究生部（日本の大学院コース）、図書館がある。各研究所のしたに記したのは、当該研究所の定期刊行物であるが、院全体のものとし て、

- 哲学研究所
- 経済研究所
- 部門経済研究所
- 上海経済研究（隔月）
- 上海経済（月間）
- 上海社会科学院季刊
- 世界経済導報
- 上海社会科学院論文選

がある。一九八一年に創立された宗教研究所についてみておくと、所長肖志恬、副所長陳耀庭・羅偉虹、宗教研究室主任高振農、副主任姚民權、宗教学研究室主任龔方震、副主任業露華の各氏以下、總てで一四人のスタッフと数人の研究生によって構成されている。宗教研究所の共同研究の成果として刊行されたのが『中国社会主義時期的宗教問題』である。このテキストについては別に論じたので詳述しないが、ともかくこれが党と政府の第六期五ヶ年計画の一環としてなされた研究の成果であり、現在は第七期五ヶ年計画の一環として「上海宗教史」と「人・社会・宗教」をテーマに研究中で、これは一九九一年に完成する予定という。

ともに担当されている。火・金の週二度出講されて研究生の指導に当たるほか、復旦大学にも出講されるというから御多忙であるはずであるが、筆者には大変よくして頂いた。通訳を通しての会話はどうしても「隔靴搔痒」の感を免れ難いが、それでも専門に亘る話は、筆談を含めれば大変よく通じた。さらに強行軍であつた福建や江西への旅に際しては数日前には先発され、人民政府の宗教局や社会科学院との折衝を繰り返され、ともかく未開放の地、あるいは初の外国人などという難関をまがりなりにも突破したのは高氏と処長王徳華氏、通訳陸一心氏、田国培氏らをはじめとする社科院外事処の人々の御協力があつたからにほかならない。

いずれにしても、かつては唯識学に関心を寄せておられた氏が「事実求是」の立場から現代中国仏教の動向に関心を持たれている点は、分析や評価のしかたで多分筆者とは立場を異にするものの、共通する部分も少なくなく、その意味で、筆者は幸運であつたといわざるをえない。

ところで先にも述べたように、筆者の社科院での指導教授は高振農氏であった。氏ははじめ上海法政大学で法律を学んだが、哲学に興味を寄せ、三〇才を過ぎてから仏教を学んだという。直接の氏は呂徵であると言われるから、それは楊文会——歐陽竟無——呂徵という学問系譜に属することになる。江蘇省常州出身の氏は、南京金陵刻經處を第二の故郷と いう。かつての論文として「論章太炎仏學思想在辛亥革命中的作用」「梁啓超的仏學思想」「熊十力的哲学思想簡介」「歐陽竟無『仏法非宗教非哲学而為今時所必需』評述」「中国仏教」など、少なからぬ成果がある。さらに、近年刊行の『中國大百科事典』の「宗教」の部の実務的な分野を陳耀庭氏と

さらにここは研究したものを、いかに社会に還元するかと

いう啓蒙的な役割もになっている。語学に堪能な研究者が、上海の外国语ブームに対応して、研修会を開いているのも珍しいことではない。日本語の特訓班だけでも三つが同時に開講され、そのほか英語があり、また法律、会計業務と、いつも何かの講習会が行なわれている。さらには性病についての知識普及の展覧会、映画会、外部の人による会議と、ともかく人の出入りが多いのである。筆者の部屋の横は小ホールであるが、ここではほとんど毎日、会議と宴会があり、結婚の披露宴もあった。極め付けは、何と言つても二階の大食堂を区切つてのダンスホールの開催で六月一日から一〇日までの間、お披露目の意味もあつてか、午後の部一元、夜の部二元で、生バンドの演奏と歌いりで、社交ダンスからディスコ風に至るまでを、文字通りガンガンやつていた。人によつては、眉をしかめる向きもあつたが、集会所的な役割も果たさなくてはならない社科院としては当然といったところであろうか。

誤解を避けるために付記しておくなら、社科院は六階建ての本部棟（研究棟）と同じく六階建の招待所や宿舎をふくむ建物と大講堂と、およそ三つの建物がコの字型になつてゐる。夜の一〇時まで騒がしいのが、この招待所棟であることはいうまでもないし、半月ほどすると、このダンスもあまり

の騒音のためか平日は中止になつた。

ところで筆者が在外研究の申請を教授会に提出したのは、たしか八六年の六月のことであつたように記憶している。そしてその目的として、

一、中国における仏教研究の動向を知ること。

二、広い意味での中国仏教界の動向を知ること。

二点を挙げたような気がしている。もしそれが筆者の記憶違ひであるとしたら、訪中した結果、右の二点に焦点を絞らざるをえなかつたと言い換えてよい。

一については、先の『宗教問題』の入手もあり、また直接関係された高氏の御教示や資料の閲覧の便宜も図つて頂いたので、少なくとも上海における宗教研究がどのような方向でなされているのかについては、ある程度細かな部分まで知りえたのではないかと思つてゐる。さらに言うなら、ここ中国では、宗教と政治社会が密接不離な関係にある、あるいは政治が主導権をとる宗教という実態を強く感じた。もちろんそれは解放後に突然始まったものではないが、ともかく文化大革命以後、社会に害毒を流さない限り、そし社会建設の発展のうえで少しでも有用であるなら、現状ではその存在を認めておこうという態度である。そこには当然、中国における社会主義体制がより発展し、人々のさまざま苦惱がなくなれば、宗教は自然に消滅するという前提と、無理矢理に事を起

こして社会発展に影響があるよりはという現実的な配慮もある。都合が悪くなつたら規制すればよいのである。問題はそのような中間的処置をどう理論づけていくかという点にある。

これは中国の実情をいささかも知る人、ないし辛亥革命後の宗教の位置付け、さらに文革中の宗教事情を知つてゐる人にとっては、大きな変化に思われよう。同時にそれは、現在の中国では、宗教信仰の自由を、現実のものとして認めても、全体の流れは変わらないという自信の結果ともいえる。かつては——筆者自身も経験したことであるが——寺に行つて「マルクス主義と宗教は両立するか」という質問がある度に、定型的な答えとして「両立する」があつた。どうしてかという点になると、相手も答えてくれないし、答えてくれても、支離滅裂が相場であつた。後になると何やら馬鹿らしくなつて質問もしなくなつたが、今般の『宗教問題』はその「両立する」という点において正に理論武装を試みたといえよう。もちろんその理論武装も、政治の側から宗教を認めるためのものであり、宗教の側でマルクス・レーニン主義を認めるかという問題ではない。思うに、二つの立場を突き合わせて云々し、どの立場が優れるかという直接的な検討が試みられ、結果として自分がどちらによるかという選択の自由は今の中にはない。さる識者の意見に寄れば「中国の坊さん

は学者をあまり好きではない。仲がよくない」という。確かに筆者がかつて読んだことのある、ある高名な学者の著述は、文革中もしたたかに生きぬいただけあって、宗教否定という立場にたつて、迷信も宗教もゴチャマゼに論じじて、辟易したことを見ている。このような学者の立場や態度を見て、ある程度勉強したことのある僧なら反感や警戒感を持つて当然であろう。

『宗教問題』の長所は、中国の学者が必要に迫られてかもしれないにしても、従来あまり試みたことのない实事求是という方法論を採用して、現実直視の立場をとつたことであり、短所はあくまでその存在を政治の世界でどう評価するか、経済の建設にどう関わつていくかという点に腐心した結果、信仰者自身の宗教理解をどう評価するかという点に言及できていない点であろう。表面的には宗教の存在をその自立性や道徳性をもつて評価しつつも、最終的にはなくなるべきものという考え方を納得しがたい部分として残るのである。勿論それは日本人として、あるいは信仰者の側から見た『宗教問題』への評価であつて、あくまでマルクス主義国家としての大成を目指す現代中国の研究成果としてみるなら、本書のとる方法論はやはり当然のものと言わざるをえないであろう。

第二の点についてはどうか。すでに駒沢大学の有志による中国仏教参観団に参加すること一〇回、歴史のうえで有名な

仏跡にはかなりの数は行つたつもりの筆者であり、その不足する部分をかなり補いえた今回の長期滞在であるが、どうもその中身という点では今一つの感がなくもない。社科院の手配は大半が省の宗教局を通して行なわれ、おかげで未開放の地にも行けたし、あっちこっちの寺では昼食を御馳走になるなど一般の観光では考えられないような待遇を受け、また同道された高先生を通して、寺の生活や経済状態などかなり細部に渡る話も聞かせてもらったのだが、これが何か本音を聞かせてもらった気がしない部分が残るのである。それは必ずしも通訳のせいばかりではないのである。考えてみると、やはり外国人の唐突なる調査というのが、ある種の警戒感を相手に持たせているように思う。温州で何日かと一緒に過ごしたカリフォルニア大学のトーマス・ゴールド氏も、市場の実態調査に来たのにさっぱり教えてくれないと嘆いていたから、苦労したのは私ばかりではないらしい。

は雑談に耽っているのを見ると正に様変りであり、開放政策がこの方面でも浸透していることを痛感する。

さらにいうなら対外開放の進んだ地域、つまり經濟的に豊かな地ほど、寺は立派に修復、と言うより新築され、ほとんど旧觀を留めていないというのも特長といえるであろう。歴史上ではほとんど知られていない寺でも豪華絢爛なものが少なくない。有名な寺ならなおさらである。これは、福建省を參觀して実感したことである。ただし福建省では媽祖信仰をはじめとした、政策の面からするとあまり好ましくない信仰や迷信の類もまた盛んであるというから、国としては痛し痒しといったところであろう。

筆者としては、一つの寺にとどまつて、寺の儀礼についてもユックリ調査するつもりであつたのだが、いくつかの理由で割愛せざるをえなかつた。

ともかく筆者がでかけて、參觀した寺について、その行程も含めて最後に一覽としておこう。今後該地を訪問される方の便宜を考えてのことであるが、詳しい里程については、近年刊行の人民交通出版社『全国公路營運線路里程示意図』というか、あるいは人間の持つ弱さというか、そういうものを強く感じる。ともかく数年前までは外国人や華僑しか訪れかた名刹大刹が今では老若男女が大勢ででかけて、線香を手にひたすら低頭を繰り返し、あるいは紙銭を折り、あるいは

れば何日もまとめてチャーチーということになる。日本的な感覚は通用せず、いずれにせよかなりタフなことが体力、精神力の両面で要求されるのである。

（補）結局この稿が書き上ったのは、八九年三月に入つてからであった。帰国後はほとんど何もやる気がせず、半年を経て少し自發的な行動がとれるようになつてからである。本誌に収録された北京大学での交流会への参加を余儀なくされた結果からもしない。ともかく思い返してみると半年間の上海滞在は疲れたと同時に大いに収穫があった。……そして六月四日の天安門広場に象徴される事件が勃発した。社会科学院刊行の『世界經濟導報』の問題もある。上海の友人達、北京の友人達を含めて、御世話を下さった人々の動向が気がかりな昨今である。同時に政治の保守化の中で、中国の宗教研究、乃至研究者が今後どう動いていくのかも気がかりである。今度もまた、政治を切り離しては考えられない中国の学問研究の実情を思い知らされたのである。

調查寺院一覽

6月 21日	16日 15日 14日	13日 12日	6月 11日	6月 8日	3日 2日	6月 1日	29 30日 31日	28日 27日	26日 5月 25日	5月 23日	5月 17日
上海 →南昌	「 ↓上海 紹興 →義烏 紹興 →諸暨 州 →紹興	天目山 →杭州 →湖 山	上海 →杭州 →天目	上海 →嘉興 · 塩官	寧波 市內 湖	寧波 →北侖 →東錢 寧波	妙果寺 · 江心寺 溫州市內 溫州 →雁蕩山 溫州 →寧波 寧波 →奉化	靈巖寺 · 觀音洞 · 白雲庵 天童山 · 阿育王寺 · 延慶寺 · 觀宗寺 雪竇山 · 岳林寺	妙果寺 · 江心寺 溫州市內 溫州 →雁蕩山 溫州 →寧波 寧波 →奉化	上海市內 上海 →溫州	上海市內 蘇州 →上海
		飛英塔 · 鐵仏寺 · 道場山	大覺寺 · 禪源寺	覺海寺 · 楞嚴寺 · 靜嚴寺 · 精嚴寺 · 天寧寺 · 金明寺 · 安國寺	天一閣 · 七塔寺 · 天封塔	阿育王寺 · 瑞岩寺 · 小普陀 · 大慈寺			圓明講堂 · 龍華寺	玉佛寺	

8月 29日	8月 23日	7月 16日	11日	10日	9日	8日	7日	7月 6日	7月 1日	30日	29日	28日	27日	26日	25日	24日	23日	22日
上海	上海→嘉定→青浦	上海→常熟→蘇州	南京↑ ↓南京	南京→常州→安徽滁縣	濟南↑ ↓濟南	上海	上海	鷺潭→上饒→廣豐	上海	博山寺	師府	石仏寺・地藏寺・寿昌寺・宝嚴塔・天	滕王閣・疎山	黃庭堅紀念館	黃壁山	楊岐山	宜春→仰山→萍鄉	南昌→宜春
泖塔	南翔寺塔・法華塔・青竜塔・万寿塔・天寧	寺・瑞光塔・光福塔・靈巖寺	天寧寺	棲霞寺・鄧那山	金陵刻經處	靈岩寺・普照寺	靈岩寺										仰山	

9月 16日	9月 15日	12日	11日	10日	9日	8日	7日	6日	5日	4日	3日	2日	9月 1日	31日	30日	— 縣	— 鄭州→登封
上海市内	(租界) 上海市内(旧日本)	成都→青城山	成都	成都	成都→峨眉山	成都→峨眉山	西安→成都	三門峽→西安	洛陽→三門峽	南陽→唐河→洛陽	平頂山→南陽	禹県→平頂山	禹県	登封→禹県	少林寺・中岳廟	少林寺・中岳廟	
国恩寺・法藏寺・留雲寺・雲居庵等	身延山別院本門寺・本門山弘立寺・西寺・常州天寧寺分院莊嚴寺	本願寺別院・觀音堂・曹洞宗長德院・高野山金剛寺・東本願寺別院・妙心寺	(禪學研究会)	青城山天師府・建陽宮・奎光塔	寶光寺・昭覺寺(圓悟塔)・文殊院	文殊院・大慈寺	文殊院	峨眉山金頂寺・報國寺	大雁塔・青竜寺・華清池・鐘樓	熊耳山空相寺	風穴寺	香巖山	丹霞山・香山寺	天寧万壽寺・懷帮会館・古釣台・首山	初祖庵・二祖庵・嵩岳寺・法王寺・達摩洞	少林寺・中岳廟	

上海市						寺院
護珠塔	塔 秀道者	経幢	塔 西林寺	方塔	松江県城東 の方塔公園 内。	所在
山 松江県天馬	松江県余山	松江県中山 小学校庭	松江県中山 西路	○	○	伽藍
×	×	×		○	○	
×	×	×		4	×	住僧
円智教寺の塔。一〇七九年に造立。七層八角、一八・八米。一四五年重修、一七八八年罹災。付近は別の目的に使われていて接近不能。山の中腹には墓	北宋代の造塔で七層八角。潮音庵の秀という道者が建塔に参加したのでこの名がつく。一八六年、フランス天主教会が余山を買ったため伽藍は破壊された。	八五九年建立の二十一層九・三米。仏頂尊勝陀羅尼を刻む。	南宋の接待院、のち現名。一三八七年重建の七層八角の塔。県佛教協会がある。蒙山施食は一回三〇〇元といい、僧の給料は七〇元という。	塔。方型九層、四二・五米、近年に修復。参拝のあと（ローソク、線香）あり。	もとの興聖教寺。北宋代の建	メ モ

西禪寺	湧泉寺	南際寺	天王寺	華藏寺	
怡山	鼓山中腹	寧德県南際公園内	寧德県城内	寧德県支提山	
○	○	○	○	○	
○	120	(6) 尼 14	17	30余	
長慶慧棲住地。伽藍修復中で、塔も新建中。寺後に墓塔があるが常盤氏紹介のものの一。寺域	普陀寺を兼住。	参拝者一日六〇〇〇人と。諸堂完備し、食堂等を經營。神晏塔現存。月給三〇~四〇元、六〇元もあると。住持妙湛法師は南	県の佛教協会所在。参拝者多く伽藍の修復も十分。月給一五~二五元。	妙果法師。	寧德県より車で一時間、山登り二時間。二〇数万元で天王殿等を修復中。明代北京から運ばれたという觀音像あり。水田・茶畑・菜園一〇〇ムーを經營し自力更生という。僧の月給は二〇~三〇元。支提寺志あり。住職

開元寺	華林寺	林陽寺	法海寺	崇福寺	
福州市芝山	福州市屏山	福州市北峰 地区瑞峰	福州市内	福州市北嶺	
○	○	○	○	○	
2	?	30 余	○	180 人	
家並みの中にあり寺域は狭い。 一大殿跡には宝松紀念堂が建ち養 老院となっている。大藏經等は すでにない。市内の東禪寺もす	現在大殿を修復中。	古月の塔あり。一〇ムーの田畠 で農業を営む。寺の責任者広賢 法師はアメリカ在住。火葬場を 営む、月に一〇体ほど。労働で きる人には基本給一〇～二〇元 +一日一元～一・二元。労働で きない人は一〇元位。	隋代の創建、清代重建。重興者 省と市の仏教協会が所在。	火葬で一日平均一人。昨年の收 入は九八一五〇元。老人にも二 〇～三〇元を支給。	尼僧中心の寺で仏学院（八〇 人）もある。もと北宋の創建で 明末に重建される。現存のものは 光緒の重建が多い。養老院 (五〇人)あり。収入の中心は 火葬で一日平均一人。昨年の收 入は九八一五〇元。老人にも二 〇～三〇元を支給。

福建 省

	万福寺	崇聖寺	定光塔
	檍山	閩侯縣雪峰	福州市于山
	○	○	○
6 (居土)	16	20 (尼 120)	×
五五八年の創建といい、現在市 の仏教協会があり、僧九〇、養 成所僧八〇人が住む。竜眼の栽 木があるという。	遺る伽藍は円通殿のみ。三年前 に隠元堂を新築。一四〇ムー の田畠で農業を営むが、毎月 六〇〇元の援助を受けている。 識者によると伽藍は民国代にす でなく、土匪に焼かれたもの	福州市から車で一時間半。天王 殿の仏像等を二七万元の予算で 修理中。三〇ムー以上の田畠で 農業を行い、華僑の寄付もあ る。月給は三〇余元。責任者は 広霖法師、崇聖方丈はシンガボ ール在住。もと三つの大雄殿が あった。義存塔、義存手植えの 杉あり。東南二～三〇〇米に枯 木庵があり、高さ三・三米、周 囲七・一米の古木の洞に義存像 を祀る。僧の月給三〇元位。	七層八角四一米。俗に白塔。

	承天寺	会元寺	三会寺	廣化寺
	巷 泉州市承天	仙游縣楓亭 塔斗山	仙游縣西の 竜山	莆田市南の 鳳凰山(南)
	○	○	○	○
	×	26	25	170
培で数万元の収入。現在三〇〇 万元で修理中。大殿前に北宋代 の三米の経幢があり、寺の東に 五層八角三六米の釈迦文仏塔が ある。基本給一〇元+読経料が 月給	もと隋代の創建で、伽藍は一九 五四年に再建されたが古いもの も遺る。田畠一二ムー・山林六 ムーを営む。住職如賢法師はマ レーシア在住。月給五~六元。	華僑の寄付により全く新築され ていて。三〇〇万元以上で天王 殿を建設中。田一九ムー・その 他六ムーで農業を営む。月給二 〇~三〇元。山上の天中万寿塔 は北宋代の石塔で、五層四角一 〇米。	華僑の寄付により全く新築され ていて。三〇〇万元以上で天王 殿を建設中。田一九ムー・その 他六ムーで農業を営む。月給二 〇~三〇元。山上の天中万寿塔 は北宋代の石塔で、五層四角一 〇米。	月給
唐代の創建。五〇ムーの境内に 大雄殿、甘露戒壇など諸堂が完 成。	南唐の南禪寺、招慶院。華僑の 寄付による数百万元で伽藍を修 復中。法堂、大雄殿はすでに完 成。	○	○	○

	上海						開元寺
	堂 円明講	寺 万石蓮	寺 南普陀	竜山寺	銅佛寺		泉州市西街
	延安西路	上海静安区	廈門寺獅山	山 廈門市五老	鎮 晋江縣安梅	園中 大廈前の公	泉州大廈前
		○	○	○	○	○	○
		60?	生 半分 学	200		×	40余
永嘉玄覺の故地。八四〇八七年	閩南仏学院の女子部。南普陀寺 のかつての住持会泉の紀念堂で ある。	円暎・明暢師資の紀念堂。上海 の仏教信者のための施設で図書 館などもある	閩南仏学院の女子部。南普陀寺 のかつての住持会泉の紀念堂で ある。	隋代の修建と。参拝者多く、城 隍廟に隣接し、算命師もいた。 唐代の普照寺、五代の泗洲院。 現名は清代から。諸堂完備、大 悲殿は一九三〇年の重建。閩南 仏学院併設。寺の年収九〇万 元、売店等一〇〇万元、その他 二〇万元。政府の援助もあると いう。月給五〇~八〇元、学生 は四〇元。廈門大学に隣接す る。	隋代の修建と。参拝者多く、城 隍廟に隣接し、算命師もいた。 唐代の普照寺、五代の泗洲院。 現名は清代から。諸堂完備、大 悲殿は一九三〇年の重建。閩南 仏学院併設。寺の年収九〇万 元、売店等一〇〇万元、その他 二〇万元。政府の援助もあると いう。月給五〇~八〇元、学生 は四〇元。廈門大学に隣接す る。	参拝者あり。	備する。東塔と西塔が遺る。泉 州を代表する大刹。

瑞岩寺	岳林寺	雪竇山	觀宗寺	延慶寺	妙果寺
北父港紫橋 鎮河頭村	奉化縣	奉化縣雪竇 山	寧波市解放 南路延慶巷	寧波市靈橋 路	溫州市松台 山下
×	○	○	○	○	○
×	×	7	×	×	8
往時の伽藍は皆無。旧境内跡地の背後に青竜・白虎の二山を擁し、竹林に囲まれる。側の小川の堰に「清蕙穎芬禪師寿塔」など で住僧ありという。	古い建物二棟が往時のものか。 現在奉化啤酒廠。	塔跡あり。千丈瀑布は寺前の山中。	仏殿新造。シンガポール等の華僑の六二万元による。寺の月収は一〇〇~二〇〇元。月給は三〇元前後。近くの妙高台に蔣介石の元別荘あり。石奇通雲の墓	三つの伽藍（仏殿・天王殿・僧房？）が遺る。	にかけてフランスの華僑の寄付六七万元で面目を一新。寺域二〇〇平米。北宋代の鐘がある。市の佛教協会がおかれる。

浙江 省									
安國寺	金明寺	天寧寺	精嚴寺	靜嚴寺	楞嚴寺	本覺寺	大慈寺	寺	小普陀
鎮北寺巷	海寧縣鹽官	嘉興市內の 范蠡湖の畔	嘉興市天寧 寺街	嘉興市內	嘉興市勤儉 路	嘉興市內	嘉興市斜西 街	鄞縣福泉山	東錢湖東岸
×	○	×	○	○	○	○	○	×	○
×	×	×	×	×	10 余	3	×	○	○
寺域跡を二米ほどの塙で囲み、 唐代の經幢三基のほか塙に石碑 をはめ込む。	西施にちなむ展覽会を開催中。	嘉興市人民法院、人民檢察院に 利用されている。	嘉興市人民法院、人民檢察院に 利用されている。	政府となっている。	もと大殿、藏經樓らしき建物あ るも、現在は嘉興市寺域区人民 政府となっている。	市佛教協会がおかれる。新建と いう大殿は民家と同じ。もと經 藏という建物もあるが、民家と なっている。明藏等なし。	北宋代建立という仏殿は修復 中。仏像は新造中。	一対の石造の狗のみが遺り、跡 地には林場・茶場の事務所が建 つ。	道仏混淆の寺。

五洩寺 諸暨県五洩 風景区	万寿寺 湖州市郊外 烈士公園の 近く道場山	鐵仏寺 路 湖州勞働街	飛英塔 湖州塔下	禪源寺 臨安縣於潛 鎮天目山
○	○	○	○	○
10 余	10 余	1	×	×
一九六九年造の水庫の湖面を渡る。修復を経た天王殿と大雄殿が残る。山中に墓塔が多くあるが靈廟の塔については未詳と。清代の「双龍湫室」の額あり。	もとの觀音殿を大雄殿として利用。大雄殿は一九七四年に焼失と。僧房と千仏閣が残る。近くの山頂に塔がみえる。	觀音を祀る。もと宋代の創建という。	唐代の石塔を、北宋代に木塔で覆う。	禪源寺（獅子正宗寺）は人民政府招待所。二時間半ほどの登山で千丈岩に相対する高峰原妙の塔（基部）に到る。近くの大樹王（ダイチヨウ）の下に清代の普同塔七基（七星塔）、同三基（三星塔）がある。三星塔の中の大きい一基が中峰明本の塔という。開山老殿が元の大覺寺であろうか。

黃檗寺 宜豐縣車上	楊岐寺 萍鄉市上栗 區楊岐山鄉	仰山寺 上 宜春市洪江 鄉東南村殿	雙林寺 義烏縣仏堂 鎮塔山鄉
×	○	×	○
×	3	×	3
古黃檗名残りの虎跑泉あり。二九年戦争で大半の伽藍が、六年、すべての伽藍がなくなる。玉堂達慧・湛虛智の墓塔などあ	尼二人・男僧一人。天王殿、佛殿、祖殿、觀音殿が残る。乘広・甄叔の塔と塔銘が残る。信者もいる。尼僧に病気を治してもらうための客あり。伽藍・像とも修復されている。	寺域は広いが、すべて田。古イチヨウの大木が二本残る。高さ二・二米の「仰山小釈迦慧寂大通寶塔」は八一年の山崩れで倒壊、その銘を刻む碑が近くの農家の踏み石として残る。山の中腹に清初の墓塔八基が残る。墓塔はまだあるらしいが未見。	もの伽藍は解放後の水庫の造成で水没、その畔に新寺を建立了。山頂に傅大士行道塔がある。

野菜の栽培等で自活していると。招待所を經營。

江西省

寿昌寺	地蔵寺	石仏寺	疎山寺	黄竜寺
南豊県城内	路 南豊県勝利	路 南豊県勝利	郷 金溪県渕湾	郷 修水県白橋
○	○	○	○	○
3 (尼 5	×	?	4	×
建て物の一部は貴溪県第三中学 破壊されたという。	岩のくぼみに地蔵尊を祀り、伽藍をかけた寺。八三年に重修。 天王殿、大殿が修復されて残る。開山は大渙慕詰。大渙に因む宝嚴塔が近くの盱江索橋の畔に建つ。無明慧經の住地の寿昌寺は黎川県にあつたが、文革で	盱江の畔。石の洞窟に觀音像があり、診療所が隣接する。 祀り、伽藍をかけた小寺。	天王殿、仏殿、僧房など修復済み。寺域の右手に觀音堂があり、盱江の畔。石の洞窟に觀音像があり、診療所が隣接する。 祀り、伽藍をかけた小寺。	慧南塔の遺址あり。五八年まで僧がいたが、文革で伽藍の大半が破壊されたという。金竜完小祀った建物が残る。山道には黃山谷の「靈源」「黃竜山」の書を刻んだ大石が残る。

山東省			天師府		
金陵刻 経処	普照寺	靈岩寺	博山寺		
路35号 南京市淮海	泰安市普照 寺路	長清県東南 方山下	広豊県博山 村河北郷	○	○
○	○	○	○	○	○
	1	○	(尼 余) 10 23	23	5
み。	り。	鐘鼓樓、大雄殿、藏經樓等あ る。文革の時にメチャクチャと なった版木十余万枚も整理済 み。	唐代創建の辟支塔、八角九級五 四米。一六七座の塔林など文物 多し。	塔を集めて納骨堂形式の海会塔 を作る。田畠はなく、信者の布 施で經營。	八四年に修復を開始 進行中。 天王殿、觀音殿、藏經樓等が残 る。墓塔はないが、以前からの 塔を集めて納骨堂形式の海会塔 を作る。田畠はなく、信者の布 施で經營。
八二年に江蘇省文物保護單位。 技術保存のため現在四〇人ほど が刻字、印刷、装訂等の任に当 る。文革の時にメチャクチャと なった版木十余万枚も整理済 み。					は像が祀られ、「貴溪県竜虎山 道教協会準備小組」の看板あり。 近くの竜虎山には水庫があり、両側の崖の中腹の穴は道士 の墓場という。五斗米道、のち の天師道の本拠地。

江蘇省			安徽省		棲霞寺	
涼寺	三峰清	興福寺	天寧寺	鄉郊寺	鄉郊古道61	山
常熟市虞山	北麓	常熟市虞山	常州市解放西路	鄉郊寺	鄉郊古道61	南京市棲霞山
×	○	○	○	○	○	○
×	(4) 尼 3 30 40	56	20 ~ 30	100 余	天王殿、佛殿、無梁殿などが残る。	伽藍文物については省略。仏学院があり一二〇人の学生がいる。
寺域はすべて雑木林。小屋が建てられ紙銭やローソクが散乱。かつて数人の僧がいたが解放後に伽藍は破壊されたという。	寺域は八七六年六〇万元で諸堂整備。興福寺塔は南宋のもので方型九層六二米。	もとの破山寺。諸堂ほぼ完備。米芾や康有為の書の石刻あり。年収三〇万元、月給五〇元。信者多く八七年六〇万元で諸堂整備。興福寺塔は南宋のもので方型九層六二米。	天王殿、仏殿など伽藍はほぼ完備。寺域は広い。天寧寺培訓班があつて一三人の僧がいる。市の仏教協会が置かれる。大藏經等はない。山じ市内紅梅公園内の文筆塔も、元は天寧寺の所属と思われる。	天王殿、仏殿など伽藍はほぼ完備。寺域は広い。天寧寺培訓班があつて一三人の僧がいる。市の仏教協会が置かれる。大藏經等はない。山じ市内紅梅公園内の文筆塔も、元は天寧寺の所属と思われる。	天王殿、仏殿など伽藍はほぼ完備。寺域は広い。天寧寺培訓班があつて一三人の僧がいる。市の仏教協会が置かれる。大藏經等はない。山じ市内紅梅公園内の文筆塔も、元は天寧寺の所属と思われる。	伽藍文物については省略。仏学院があり一二〇人の学生がいる。

山上海	旧身延	海別院	願寺上	旧東本	泖塔	万寿塔	青童塔	法華塔	塔	南翔寺	光福塔	瑞光塔	天寧寺
乍浦路439号		武昌路380号	鎮	青浦縣沈巷	鎮	青浦縣青浦	青浦縣	嘉定縣嘉定	鎮大街	嘉定縣南翔	吳縣光福鎮	蘇州市盤門內	蘇州市葑門路
×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
×	幼稚園。	もと骨灰寄存処。現在は住宅。	唐代創建。方形五級。	清代創建。方形七級。	宋代重建。八角七級。	唐の報徳寺の塔。唐代建塔、北宋重建。八角七級。	南宋代、方形七級。	南宋の雲翔寺の山門前の双塔。	ともに八角七級約八米。	もと南朝梁代、現存のものは清代。方型七級二〇余米。	七年建塔、八角十三級四三米。	現在修復中。	赤鳥年間の普濟禪院の塔。二四年建塔、八角十三級四三米。
													中共蘇州市郊区委員會黨校となる。門前の狛犬の像が往時のものか不明。

上海市

別院本 門寺 願寺上 旧西本 海別院 旧高野 山金剛 寺 宗長徳 院 本門山 仏立寺 觀音堂 妙心寺 光明寺 布教所 寧寺分 院 常州天	
国恩寺	
普安路 175号	太倉路 140号
×	×
×	×
倉庫	電子器四廠の倉庫。 ?

四川省	大慈寺	福慧寺	清涼寺	海會寺	法藏寺	報德庵	寺 留雲禪
宝光寺	大慈寺	福慧寺	清涼寺	海會寺	法藏寺	報德庵	寺 留雲禪
新都県北方	成都市東風路	宛平路 66号	牛庄路 60号	麗園路 764号	廬湾区吉安路 567号	閣路 64号	關北、嚴家街 78号
○	○	×	×	×	×	×	
100余	×	×	×	×	×	×	
三〇元。	唐代創建、現在博物館	住宅	所在不明	上海針績一四廠工場	ラジオ工場	アパート	所在不明
等あり。笑宗密印塔あり。月給 三〇〇〇人と。清代の五百羅漢 伽藍整備され觀光客多し、一日							

補1、各地の寺院を訪問する上では、すでに訪れたことのあるものについては、できるかぎりこれを省いた。「メモ」の部分はあくまで現地での取材の結果であり、歴史等については当該の地方誌や山志、さらに『中国名勝詞典』、常盤大定氏の一連の成果を参照されたい。

補2、福建の調査については、同道された社科院高振農氏の御協力によるところが多い。福州で福建省宗教局の施崇茂氏の話を聞く機会を得たが、それによれば福建省には現在でも二千以上の寺院があり、一万二千人の僧（そのうちの三分の一が尼）がいるという。この数は、寺院数で全国の二分の一、人数で三分の一という。人数的には一県で数千人の例もあり、無住寺院を含めた寺院数はもっと多いという。

補3、仏学院については数ヶ所をみたが、参考のためそのカリキュラムを掲げる。閩南仏学院は南普陀寺にある。住持の湛如法師の御教示を総合すると次のようになる。南普陀寺には一九三四年以後、養正院が置かれていた。文革後の八一年に一〇余名の学生が擁して再開され、八五年に閩南仏学院として正式に再開する。二年間の予科班を卒業すればさらに二年の本科に進むことができる。男僧だけで現在六〇余人があり、以前からの学生を合わせて九〇人以上という。尼僧も予科本科に分かれ約六〇人を擁している。教師は一〇人の僧と、廈門大学から非常勤を招いている。学生の生活費として食費を別にして四〇元以上（本科）、予科生で三〇元以上である。

補4、浙江・江西の両省については、すでに『中国仏蹟見聞記』に

て関説されるものが少くない。今般の現地訪問はその不備を補うものであるが、その点では八七年に両省を訪問された愛知学院大学鈴木哲雄氏の御教示による面が多かった。記して謝意を捧げたい。

補5、上海市内、旧日本租界にあった寺については游有維『上海近代佛教簡史』（八八年、華東師範大出版社）によつた。游氏にお会いする予定であったが、氏が入院加療されたため断念せざるをえなかつた。

補6、四川省と河南省の寺院については第一〇次駒大訪中団に同行して參觀したので、それらについては同団の『中国仏蹟見聞記』第一〇号を参考されたい。本表に収録したのは、同団が未訪の二ヶ寺である。なお成都市文殊院では維摩經舍を前身とする禪学研究会のメンバーと会い瓦屋能光所住の碧鶲坊についての情報を御教示賜つた。詳細は佐藤秀孝氏「入唐僧瓦屋能光禪師の軌跡」（『傘松』昭和六四年一月～三月）を参考されたい。またメンバーの一人、馮學成氏によると、四川の寺院は現在一〇〇ヶ寺未満（チベットを含む）、僧（漢族のみ）一〇〇〇人があるという。淨衆寺、保唐寺については不明。馬祖の生地には古寺が建つという。

〈図1〉

閩南仏学院第二学年第一学期正科女衆課程表			1998.3.1				
課時		一	二	三	四	五	六
上	8:00 — 8:45	成唯識論	華嚴經	中仏史	語文	攝論	中觀
	9:00 — 9:45	成唯識論	華嚴經	中仏史	語文	攝論	中觀
午	10:00 — 10:45	成唯識論	書法	中仏史		攝論	
	10:45 — 11:30		書法				
下	2:00 — 2:45	攝論	語文	政治	華嚴經	成唯識論	労働
	3:00 — 3:45	攝論	語文	政治	華嚴經	成唯識論	労働

〈図2〉

閩南仏学院第二学年第一学期養正院課程表			1998.3.1				
課時		一	二	三	四	五	六
上	8:30 — 9:15	妙慧経	善生経	仏学入門	語文	遺教経	語文
	9:30 — 10:15	妙慧経	善生経	仏学入門	語文	遺教経	語文
午	10:30 — 11:15		善生経		語文	遺教経	語文
下	3:00 — 3:45	遺教経	政治	妙慧経	書法	仏学入門	労働
	4:45 — 3:45	遺教経	政治	妙慧経	書法	仏学入門	労働

*時間は夏時間

閩南佛學院1988年上學期各學科期中考一覽表

<図3>

男 衆 正 科 班	時 間	學 科	主 考	監 考
	5月3日 星期二 上午	攝論	顧興根	
	(同 上) 下午	書法	張□江	
	5月4日 星期三 上午	唯識	單培根	
	5月6日 星期五 上午	語文	王良海	
	5月9日 星期一 下午	哲學	陳進坤	
	5月13日 星期五 下午	古代史	許周林	

男 衆 予 科 班	時 間	學 科	主 考	監 考
	5月2日 星期一 上午	五蘊論	顧興根	
	(同 上) 下午	書法	張□江	
	5月3日 星期二 上午	印度佛教史	湛如	
	5月4日 星期三 下午	近代史	許周林	
	5月5日 星期四 上午	菩提道論	宏覺	
	5月6日 星期五 下午	古代史	陳進坤	
	5月9日 星期一 上午	大乘起信論	誠信	
	5月11日 星期三 上午	語文	吳□飛	
	5月13日 星期三 上午	俱舍論	了法	

養 正 院	時 間	學 科	主 考	監 考
	5月2日 星期一 上午	妙慧經	曷顧	
	5月4日 星期三 上午	仏學入門	德雄	
	5月5日 星期四 上午	書法	張□江	
	5月6日 星期五 上午	遺教經	賢心	
	5月12日 星期四 下午	語文	許長庵	
		仏說善生經	仁熙	

	時 間	學 科	主 考	監 考
女 衆 正 科	4月30日 星期六 上午	攝 論	顧興根	
	5月2日 星期一 上午	成唯識	單培根	
	5月3日 星期二 上午	書 法	陳美祥	
	5月5日 星期四 上午	語 文	王良海	

	時 間	學 科	主 考	監 考
女 衆 予 科 班	5月2日 星期一 上午	菩提道論	宏 覺	
	5月3日 星期二 上午	書 法	陣美祥	
	5月11日 星期三 上午	俱舍論	了 法	
	5月5日 星期四 上午	語 文	吳源俊	(略)
	(同 上) 下午	發菩提心論	果 慧	
	5月7日 星期六 上午	印度佛教史	湛 如	
	5月13日 星期五 上午	大乘起信論	誠 信	

閩南佛學院夏時制時間表

〈図4〉

1	鐘 鼓	5:20分
2	早 殿	5:40分
3	早 餐	6:40分
4	早 上課	8:30分
5	午 餐	11:30分
6	午 上課	15:00分
7	晚 殿	17:00分
8	晚 餐	18:00分
9	熄 灯	22:30分

(1988年4月18日)

福建仏学院文化班課程表

1988年3月5日 <図5>

科 目 斜 時 間		星期	1	2	3	4	5	6	日
上 午	勞 勵								
	2:00 — 2:50	近 代 史	法苑 談叢	語 文	語 文	語 文	遺教 三教		
下 午	3:00 — 3:50	近 代 史	法苑 談叢	語 文	法苑 談叢	遺教 三經	遺教 三經		
	4:10 — 5:10	晚殿							
晚 上	7:00 — 8:30	听 戒 律	自 習	自 習	自 習	自 習	書 法		

福建仏学院文化班課程表

1988年上学期 <図6>

	項 目	(電鈴) 打板時間	集中時間	備 注
上 午	起 床	4:10		如有仏事3:50打板 4:00集中
	早 殿	4:10	4:30	
	早 餐	6:00	6:10	
	打掃衛生	6:50—7:30		
	上 課	7:50	8:00	三節課到10:50分
	午 餐	11:00	11:10	
	午 休	12:00—1:30		
下 午	上 課	1:50	2:00	三節課到3:50分
	晚 殿	4:00	4:10	
	晚 餐	5:20	5:30	
晚 間	自 習	7:00—8:30	6:50	
	予備熄灯	8:50		
	熄 灯	9:00		

(夏時間では各30分ずつづれる)

中国佛学院栖霞山分院第二学年二学期課程表

1998.3.1 <図7>

		科 目 星期	一	二	三	四	五	六
上 午	時 間							
上 午	8:10~ 9:00	会計常識 (范)	戒 律 (継)	日 語 (朱)	戒 律 (継)	佛学概論 (史)	佛典選読 (程)	
	9:10~ 10:00	同 上	佛学概論 (史)	同 上	佛 史 (詹)	同 上	同 上	
	10:00~ 10:20	課 間 活 動						
	10:20~ 11:10	地 理 (孫)	同 上	佛 史 (詹)	佛典選読 (程)	歴 史 (孫)	歴 史 (孫)	
下 午	2:10~ 3:00	政 治 (張)	日 語 (朱)	政 治 (張)	古典文学 (介)	古典文学 (介)	唯識二十頌 (元)	
	3:10~ 4:00	同 上	同 上	佛 史 (詹)	同 上	同 上	同 上	
	4:00~ 5:30	自由活動	晚 殿	晚 殿	晚 殿	自由活動	整潔活動	
	7:40~ 9:30	自 修					自由活動	